

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子  
気鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画

# 20世紀歌人群像

8 斎藤茂吉

小池光

間もなく21世紀。  
近代短歌から現代短歌へ…  
短歌はこの100年でどのような足跡を残してきたのだろうか。  
24人の歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する。



## 第一章

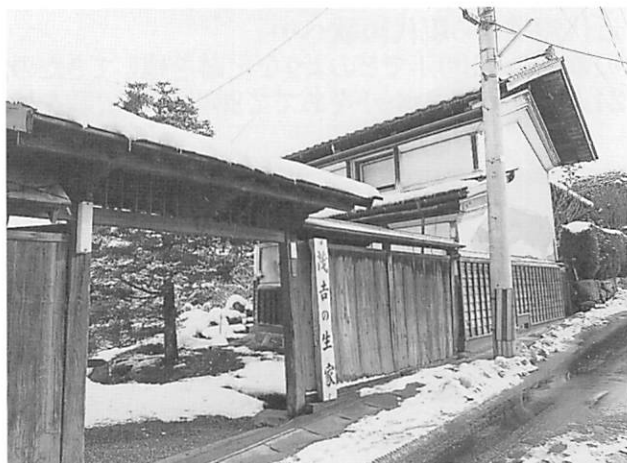
### 人と時代

斎藤茂吉は明治十五年五月十四日山形県南村山郡金瓶村（現・上山市）に生まれた。父・守谷伝右衛門、母・いくの三男である。当時の金瓶は八十戸ほどで、生家は「自作農地一町八反、年貢米百俵以内」の農家、「村では中位より一寸いい程の生活」（弟・高橋四郎兵衛談）であった。

学校の成績がよく、神童視されたのは他の名を成した文学者と変わりない。習字、絵が得意で、またいくさごっこなどに熱中した。幼年期の思い出はのちに『念珠集』の随筆に精彩あふれる筆致で書かれる。尋常小学校から上山高等小学校に進む。東京で病院を開いていた遠縁の斎藤紀一が茂吉の出来のよいの目をつけて上京を促し、明治二十九年十四歳で金瓶を出る。浅草東三筋町の斎藤家に寄寓し医者になるための勉学に励む。開成中学校に転入、同校卒業後第一高等学校、東京帝国大学医科大学へ進む。前後して正式に斎藤家の養子となり斎藤茂吉となった。

短歌は兄や友人の影響で十代からはじめていたが、明治三十八年神田の貸本屋から正岡子規の『竹の里歌』を借りて読み、本格的にのめりこんだ。翌年伊藤左千夫を尋ねその門に入る。「馬酔木」第三卷第二号にはじめて歌五首がのった。「馬酔木」はまもなく廃刊、「アカネ」を経て明治四十一年「アララギ」が創刊されるが中心的存在として情熱を注ぐ。明治四十四年からは編集を担当した。

大正二年十月、三十一歳の秋、処女歌集『赤光』を東雲堂より出版、歌壇内外からの脚光を浴びる。「僕の詩歌に対する眼は誰のお世



（現・上山市）板垣の生家の茂吉  
話になったのでもない。  
齋藤茂吉にあって貰った  
のである。もう今では十  
数年以前、戸山の原に近  
い借家の二階に『赤光』  
の一卷を読まなかつたと  
すれば、僕は未だ耳木菟  
のやうに、大いなる詩歌  
の日の光をかい間見るこ  
とさへ出来なかつたであ  
らう。」と後に芥川龍之介  
は書いている。巣鴨病院、  
大学付属病院の精神科医  
を勤める。

大正三年紀一の長女輝子と結婚。六年には長崎医学専門学校教授として長崎に赴く。歌集『あらたま』の時代である。また「アララギ」に「短歌に於ける写生の説」を連載し、実相観入というキーワードに基づく写生原理を確立した。三十代後半になっていく。

大正十年から三年間文部省在外研究員を命じられウィーン、ミュンヘンに留学した。研究のかたわらさかんに欧州各地を旅行した。『遠遊』『遍歴』の歌を詠み、また帰国後はいわゆる滞欧随筆と呼ばれる、結晶度抜群の独自の一連の散文を生んだ。ただし帰国の船上で青山脳病院全焼の報に接し、また結婚生活の不調和に悩み実生活上苦難の時代が始まる。

昭和期に入つての茂吉は現実の困難に打ちかつべくいよいよエネ

ルギツシュに文学に力をそそぐ。石樽茂、太田水穂らとの異常なまでの粘着力を発揮した論争、膨大な柿本人麿研究、旺盛な随筆の執筆、そして『石泉』『白桃』『寒雲』『寒紅』などの歌集作品群を生む。この間にはまた「精神的負傷」による夫人との別居生活と、永井ふさ子との恋愛が重なっている。

戦争に傾斜する中で、茂吉は率先して愛国歌、翼賛歌を発表し、もつとも戦争に協力を果たした歌人のひとりとなった。

戦争末期になって青山脳病院の業を廃して郷里金瓶に疎開した。二十一年大石田に移り、敗戦による悲哀と挫折、またせまりくる老いと病苦に直面しつつ『白き山』に結晶する数々の絶唱を生んだ。

昭和二十二年に帰京しこれまでの歌作を次々に歌集に編みながら晩年を迎えた。昭和二十五年に読売文学賞、二十六年には文化勲章を受ける。二十八年二月、心臓喘息のため逝く。七十一歳。墓は東京青山墓地と郷里金瓶宝泉寺にある。

## 第二章

### 歌と時代

明治三十八年から昭和二十七年までのほぼ半世紀にわたって、齋藤茂吉は歌を詠み続けた。刊行歌集は選集を除く『赤光』から『つきかげ』に至る十七冊、生涯の総歌数は一万七千余首といわれる。名歌名唱の類、人々によく知られた歌、またセンセイションを巻き起こした歌はまことに多数、質量ともに他の追隨を許さない。限られた数首を紹介、鑑賞してその一端に触れよう。

り  
のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふな  
「赤光」

大正二年に世に出た『赤光』は近代人の複雑な感情生活を大胆かつ率直にこの古い形式に盛り上げ、連作の手法を駆使して短歌をドラマの位置にまで高めることでまさに一世を画した歌集となった。「死にたまふ母」はなかでも今日に至るまでもっとも愛唱される一連である。大正二年五月に実母危篤の連絡を受けて帰郷した茂吉は、末期の母を看取り、死に立ち会い、残された一族が埋葬後温泉に身を休めるまでを五十九首の短歌連作に編んだ。右作はその荘厳な生と死のドラマのクライマックスに位置する一首で、まさに息を引き取らんとする間際の母を劇的に歌い上げていく。

人口に膾炙したこの一首はごく見通しのよい構成をもっている。農家の開いた戸口から燕が室内に入ってきて梁にとまっている。それをありのままに上句に配しただけのようだが、結果的に生と死のあざやかな対比を構成したことが、神秘的な印象を刻んだ。燕は一羽でなく二羽である。二という数字は、蕪村の「さみだれや大河を前に家二軒」にあるように人間社会の最小単位を喚起する。生の側にあるものは常に二人以上で生きているが、死はあくまで一人のものだ。一羽の燕ではなく、二羽の燕が見下ろすとき死者の孤独は際立つのである。その燕は「羽黒き」でもなく「胸白き」でもなく「のど赤き」と把握される。この赤はいくまでもなくいのちそのものを象徴する。梁という家そのものの核心部から、さながら天界から地界を見下ろすように、生が死を荘厳ななかに凝視する構図が生まれた。下句の大詠嘆が、そこから一気に引き降ろされてくる。

赤茄子の腐れてゐるところより幾程もなき歩みなりけり  
『赤光』

「死にたまふ母」のような整った連作だけでなく、『赤光』にはまたさまざまな新しい素材や場面、そしてきわめて大胆な実験的作風がみられる。前衛といつてよいほどのラジカル（急進的）な作品が点在し、今日依然としてその鮮度を失わない。上作は、ああ、それはトマトが腐っていたところからいくらもいかないところのことであった！という、ただそれだけの歌意になるが、詠嘆の場面について語りつつ詠嘆の自身を一切語らない。「それは」の自身を主語とすれば主語が欠落している。解釈は一切読者にゆだねられ、難解といえばなんともし難解だが、また類例のない暗示力をはらみ、謎が読む者を引きつけて離さない。

「赤茄子」という泥臭い一語からだしぬけに始まり、「腐れてゐたる」とさらに異様なイメージを加速させ、三、四句でそれをいったんは緩めてから、結句「歩みなりけり」の詠嘆に突入してゆく。きわめて端正でダイナミックなしらが様式の完璧性を感じさせ、そのことがかえって謎を謎として際立たせている。『赤光』にはこのように異常ともいえる怪奇な幻想が方々にちりばめられ、際だった個性を示している。

とほき彼方の壁の上にはくれなるの衣を著たるマリア・マ  
グダレナ  
『寒雲』

眼前にないものを眼前にあるかのように想像する能力は人間を人間たらしめる能力であるが、茂吉はこの力が実に巨大であった。『赤光』の時代はこれが空想というにふさわしいあらわれを示すが、しだいに沈潜し屈折の度を深くしてくる。幻想や空想もまた生のいとなみであり「生のあらはれ」である。茂吉の「写生」はけっしてり

アリズムには還元されない、人間精神の暗黒部へ照射していた。あるときふとマグダラのマリアの像が脳裏をよぎったという歌である。そこに現実との何の因果関係があるのでもない。ふと鮮明なまぼろしが到来し、須臾の間に去ってゆく。「くれなるの衣」という一点の色彩が息を呑むように鮮やかである。

### 電信隊浄水池 女子大学 刑務所 射撃場 塹壕 赤羽の鉄橋 隅 田川 品川 湾

『たかはら』

昭和四年の「虚空小吟」から。茂吉や前田夕暮らが新聞社の飛行機に搭乗し、上空からの印象を即詠したものである。茂吉の特色は一面で実にどのような歌でもあるという表現の多様性にあるが、その極端例を示すものとして引く。上空から見えるものを次々に名詞羅列して一首の歌として差し出す。破調といってもこんなべらぼうな破調はふつうでなくともありえないし、自由律というのともまた違う。「赤羽の鉄橋」にあらわれた一字のひらがながしらべの上で微妙なはたらきをしている。併置された名詞群が、昭和初期の都市空間をみごとに再構成していることも眼力である。

### 王宮の秘めたる苑にめぐりあひ時雨にぬるる栗の毬ふむ

『連山』

採り上げられることのまずない一首だが私のひそかに愛唱する歌である。昭和五年満州（中国東北部）を旅し、帰途、朝鮮での作。茂吉の歌集を読んでゆくととはっとするほど美しいものに出合っばし目が釘付けになるという体験をするが、この歌などがそうで、ものしずかですっきりとした空間が息づき、なんともよい気持ちにさ

せられる。「めぐりあひ」が眼目で、このややもすると通俗メロドラマ用語のような一動詞を見事に語本来の意義に蘇生している。王宮を巡り歩いて、そこで出会ったからまさに「めぐりあひ」なのだが、このような鮮やかな語の蘇生は卓越した言語感覚がなければなしえない。茂吉の言葉へのアンテナは、実にするどいものがあつた。

### おしなべて境も見えず雪つもる墓地の一隅をわが通り居り

『白き山』

『白き山』は『赤光』とならぶ茂吉の二大峰として世評は定まっている。いかにも名歌絶唱の名にふさわしい作がいくつもあつたが、これなども別の意味で驚いていい歌である。というのは、ここに雪の墓地の片隅を今まざまざと歩いている茂吉その人を、読者はまぎれもなく幻視するからだ。一方こう歌っているのも茂吉その人である。「茂吉」が作者と登場人物とにいつのまにか分かれてしまっている。こういう自我の分裂とでもいべき光景は、茂吉の短歌や散文に接するときたびたび出会う特色のひとつできわめて興味ぶかい。

### ここに来て狐を見るは樂しかり狐の香こそ日本古代の香

『つきかげ』

『白き山』以降の作を集めて死後最終歌集『つきかげ』が編まれた。『つきかげ』の歌風は天衣無縫というにふさわしく、老境による研ぎ澄まされた表現の構築力の衰退が、かえって自在でのびやかな境地を生み、面白味という点では全歌集中『赤光』に並ぶ。

狐は茂吉にとって気になる動物だったようではかにも詠んでいる。帰京後に動物園をたずねた折りであろう、檻中の狐が放つするどい

けだものの匂においに老境の感性が咄ちや嗟さに感応し、これを日本古代の香であると感じた。そういう歌である。なにゆえ狐の香が日本古代に通ずるのか、日本古代の香とは何か、そういう筋道立った理屈はあえて捨象した方がいい。国家成立以前の太古の闇やみが狐の香をまつてまっすぐ眼前する氣息を味わえば足る。こういう天を翔やくような空想のするとき、豊かさが『つきかげ』には無数にある。

### 第三章

#### 短歌史におけるポジション

近代短歌の歴史の上に斎藤茂吉の占める位置は突出して大きい。近代詩における萩原朔太郎はぎわら したろう、小説における森鷗外もりおうがい、夏目漱石なつめ そうせきと相等的。短歌という古い詩型を近代に甦よみがえらせ、近代精神の表現として短歌が充分に有力な可能性をもっていることを示した。万葉の骨格を限りなく尊重しつつ、きわめて多彩な短歌のあり様を実践的に追求した。短歌作法を「写生」の一語に集約し、これを「実相じつそうに観入かんいりして自然・自己一元の生を写す」と定義した。また「生いきのあらはれ」ともいふ短歌は詠嘆の詩型であるともいった。近代短歌の大きな輪

郭を規定した立言であり、その強固な磁場は広大で、賛同するにせよ反発するにせよ現代の短歌まで依然茂吉のてのひらの上にあるとさえ言い得る。

斎藤茂吉は又膨大な量の散文を書いた。滞欧随筆を筆頭にしてそれらは歌人の余技というのにはとどまらない、一級の文学作品として今日に残っている。短歌だけでなく文学全体の領域の中の多力者でありこの点でも他の歌人に置き換えることはできない。

宇野浩二うのこうじは茂吉散文の妙味を語って、茂吉の文章と面白さは人間としての茂吉の面白さにゆきつく、というようにことを述べた。いかにも至言である。一高、東京帝大で学び、ヨーロッパに留学し、大病院の院長であり、芸術院会員、学士院会員という最高の榮譽に浴しながら、山形の農民の子という風貌ふうぼうや言動を最後まで色濃くとどめた。勤勉で、忍耐にんたいがよくねばり強く、忍従にんじゆに忍従を重ね、一方で小心で權威に弱く思い込みが激しく、すべてに度を過ぎたところがあつた。大知識人でありながら平凡な庶民の健康さと狡さずさを合わせ持ち、その矛盾を矛盾として抱え込まず、平然と混沌こん沌を生きた点でも近代の文学者としてきわめてユニークな位置にある。

茂吉の作歌活動の半世紀は、明治三十八年の日露戦争にはじまり、昭和二十七年の戦後に終わる。そこには戦争に継ぐ戦争のわが国の激動期が過不足なく重なる。多くの局面にあつて茂吉は激情のおもむくまま盲目的に突進し、悲惨ひつぱんというよりほかない思考の欠落をも露呈した。斎藤茂吉という現象は、そういう意味を含めて近代の巨大な人間の多面体である。

(こいけ・ひかる 「短歌人」編集人)

※次号は釈道空(米川千嘉子筆)です。